News ニューズ

第25回日本医学会総会が開催

21世紀の医学・医療を展望

登録者二万六〇〇〇人超える

第二五回日本医学会総会（会頭＝高久史麿自治医大学長）が二～四日の三日間（医学展示・博覧会は三月三十日～四月八日の一〇日間）、「社会とともにあゆむ医学―開かれた医療の世紀へ」をメインテーマに東京国際フォーラムなど都内三会場で開催された。今回の総会は、第一回日本聯合医学会（一九〇二年）の開催以来約一〇〇年という節目に当たり、また、今世紀最後の総会ということもあって、二〇世紀の医学・医療を振り返り、二一世紀を展望するという色彩の強いものとなった。

学術プログラムでは、ES細胞の臨床的応用、遺伝子医療の問題などが注目を集め、最先端の医学を巡り熱心な討論が展開された。「〝生命（いのち）〟の博覧会」として初めて一般公開を行った医学展示・博覧会は二五万人以上の来場者を集めた。総会登録者数は前回の名古屋総会の二万九〇〇〇人に及ばなかったものの、最終的には二万六〇〇〇人超となった（三三～四〇頁にグラビア、八七～八九頁に会頭・開会・閉会講演、坪井日医会長による特別講演の要旨を掲載）。

今世紀最後となった医学会総会

二日の開会式は、天皇皇后両陛下ご臨席の下、来賓として小渕首相、有馬文相、野田郵政相、坪井日医会長を迎えて行われた。

まず、式辞に立った高久会頭は、二一世紀の医学・医療の課題として高度先進医療の医療現場への導入、生活習慣病の予防・治療の二つを挙げながら、「私どもは医学を研究し、医療技術を開発し、その情報を公開するとともに、専門家として意見を述べる必要がある。しかし、それを最終的に医療として受け入れるかどうかは国民自身が決めるべきであると考え、今回のテーマを『社会とともにあゆむ医学』とした」と、今総会の趣旨を説明。

続いて、天皇陛下がお言葉（次頁に抜粋）を述べ、今世紀の医学の進歩を振り返りつつ、進歩と共にもたらされ得る危険に医学界が注意深く対応していくこと、医学の専門化の流れの中で医師が常に人間と社会に対する洞察力、総合的視野を持つことを希望された。

さらに、小渕首相、有馬文相、坪井日医会長より祝辞が述べられ、野田郵政相より同日発行された今総会の記念切手（三八頁に写真）の初売り切手が高久会頭に授与された。

ES細胞の応用や遺伝子医療が話題に

学術プログラムでは、会頭・開会・閉会講演、臓器移植緊急報告会のほか、一二題の特別講演、二九題のレクチャー、一五九題のレクチャーシリーズ、一五〇題のシンポジウム、四八題のパネル、三〇題のテーマシリーズ、二一題の市民公開講座が行われた。

このうち会頭講演では、高久会頭が、昨年米国の研究者により開発されたヒトのES細胞（そのままで個体を発生するものではないが、体の中のほとんどすべての細胞になり得る能力を持つ細胞。胚幹細胞）を最近の注目すべき話題として取り上げ、その臨床的な応用がいかに多くの医学的問題を解決するかを強調。加えて遺伝子医療の問題にも触れ、最近二〇〇五年から二〇〇三年に短縮されたヒトゲノムプロジェクトの完了時期はさらに短縮され、二一世紀に入ると間もなくヒトのDNAの全塩基配列は明らかにされるとの見通しを示した。

一方、開会講演を行った伊藤正男副会頭は、分子・細胞レベルで病気を征圧する構想が成功を収める一方で、複雑なシステムである臓器をいかに人工臓器化するかなどの問題が浮上している先端医学の現況を解説。閉会講演を行った評論家の立花　隆氏は、米国で急速に発達してきたTissue Engineering（生体組織工

学）の話題を中心に、日本でも注目を浴びつつある再生医学の最新動向を紹介し、この医学の登場によって人間や生命に関する従来の常識は大きく見直されることになるとの予測を示した。

また、法施行後初の脳死移植実施を受けて企画された臓器移植緊急報告会は、移植ネットワークの寺岡慧常任理事、移植施設側の松田　暉阪大教授、川崎誠治信州大教授に対し、作家の中島みち氏が一般市民の立場から疑問を投げかける形で展開。法的脳死判定の手順に手違いがあったことについて「医学的には問題なかった」とする寺岡氏に、中島氏は「成立過程であれだけもめた法なのに、それが遵守できないようでは安心できない。医療側は想像力を持って普通の人間の疑問に答えて」と訴えた。

このほか特別講演では、日医の坪井会長が、高次医療への投資増を視野に入れつつ医療保険制度を再構築する必要性を指摘。今総会の準備委員長を務めた国立国際医療センターの矢崎義雄院長は、二一世紀の臨床研究を展望し、遺伝子治療の進歩により、今は心臓移植に頼るしか方法がない患者も、早ければ五年以内に移植を受けなくても生き続けられるようになるとの見通しを示した。レクチャー、パネルでは、クローン技術、新しい肝炎ウイルス、介護保険、内分泌かく乱化学物質が緊急テーマとして取り上げられた。

連日記者会見開く

会期中は東京国際フォーラムで連日記者会見が行われたが、初日（二日）は天皇陛下のお言葉が特に話題となり、森日本医学会長は「内容的にも濃いものだった」と謝意を表明。

また、緊急テーマのクローン技術について講演した東大医科研の勝木元也教授も出席し、クローン技術以上に重要な意味を持つＥＳ細胞の利用価値を強調。「倫理的な問題を整理した上で、ヒトに使うことができるようになれば、これは医療の様々な面で革命的な方法を提出する細胞である」と述べた。

記者会見に臨む高久会頭（中央）

二日目（三日）には、臓器移植緊急報告会の司会者、パネリストらが会見に臨み、中島氏から多くの疑問が提示されたことについて司会を務めた矢崎氏がコメント。「医師側が当然と思っていることが、違う視点から見ると、おやっという ところもあったのだと思う。今日は議論を進めるところまで行かなかったが、指摘されたことは真摯に受け止めたい」との見解を示した。

次期会頭が意欲表明

四日に行われた閉会式では、高久会頭、森会長の挨拶に続いて次期会頭の杉岡洋一九大総長が登壇。第二六回総会に向けて「二一世紀初頭の医学・医療の最先端を直視し、教育を含めそのあるべき姿の方向付けを行う、意義深い総会にしたい」と意欲を表明した。

なお、第二六回総会は二〇〇三年四月四～六日、九州大、久留米大、福岡大、産業医大の主務により福岡市内で開催される予定。

本誌では、第三九一三号（四月二十四日号）に今総会の主なプログラムの模様を一挙掲載する予定です。

天皇陛下お言葉（抜粋）

今世紀後半の医学は、科学技術の発達と相まって病気の早期発見や有効な治療法の開発を可能にし、今日わが国の人々はこの恩恵に浴し、今世紀前半には考えられなかったような健康で幸せな生活を享受することができるようになりました。しかしこのような進歩には光と影が内包されており、誠に残念なことに、公害や薬害により健康に重大な影響を受けた人々があったことも、また事実であります。今後、進歩と共にもたらされ得る危険に対し、これを予見し、常に注意深く対応していくことが、医学界および関係行政にとっての大きな課題となり、責任となっていくことと思います。

また、今日の医学の著しい進歩は、医学の各分野に専門化と細分化をもたらしてきました。その結果、医学に携わる人々には、今までにも増して最新の医療技術に精通するのみならず、常に、人間と社会に対する深い洞察力と広い総合的視野を持つことが求められてきています。日々医療に携わる人々の労苦はいかばかりのものかと深く察せられますが、どうか皆さんが力を合わせ、国民の、また、世界の人々の幸せのため、力を尽くしていかれることを切に希望します。